

米国の職場における異性愛規範

——若年層性的マイノリティのインタビュー調査から——

フロリダ州立大学 上野康司

1. 目的

アメリカにおいて、セクシュアルマイノリティ（セクマイ）労働者の人権を保護しようという動きが、州・地方政府や雇用者の間でみられるが、近年の研究によると、職場には、異性愛規範（heteronormativity）が根強く残っており、セクマイ労働者は差別を被り、キャリア上での不利益を課せられている。しかし、このような研究は、セクマイ労働者の職場体験が年齢層によって異なる、という可能性について、言及していない。本研究では、若年層のセクマイ労働者に焦点をあて、彼らの職場・労働市場での地位が、職場体験にどのような影響を及ぼすのかを探った。

2. 方法

アメリカ南西部の都市で、性的マイノリティの若者を対象にインタビューを行った (N=52)。

3. 結果

参加者には、自らの職場が寛容的であると述べる傾向があった。同時に、彼らの多くが、職場に異性愛規範的な一面があることを指摘した。例えば、異性愛者であるという前提で扱われたり、自分の性を直接否定されたり、性の自己表現として身につけた服装を批判されたりした。また、彼らの職場での地位が低いと、上司・先輩から、言葉での嫌がらせを受けた。多くの参加者は、若年層に特徴的な、接客を必要とするサービス職に就いていたため、客に嫌がらせをうけたり、同僚がセクマイの客に差別をするのを目撃した。

4. 結論

アメリカの職場には、依然、異性愛規範が根強く残るが、それがセクマイ労働者の職場体験にどのような影響を及ぼすのか考える上で、年齢層が大切な要因であることが分かった。日本では、アメリカに比べ、性の多様性を重んじようという動きが進んでいないため、職場でも異性愛規範が更に強く、セクマイの職場体験は、より厳しいと考えられる。また、日本の職場は、年齢・役職による上下関係が明確であり、セクマイ労働者が上司・先輩から嫌がらせを受ける要因となりえるが、セクマイ労働者がセクマイであることを職場で公言できないため、直接批判されたり、嫌がらせを受けたりする頻度は低いと考えられる。また、日本では、客を神聖化する傾向があり、セクマイ労働者が客から差別を受ける危険性を高めるかもしれない。しかし、セクマイであることを隠して働いている労働者が多いため、客から直接嫌がらせを受けることは、少ないと考えられる。

文献

Ueno, Koji, Abraham E. Pena-Talamantes, Teresa A. Roach, Amanda N. Nix, and Lacey J. Ritter. 2018. "Sexuality-Free Careers? Sexual Minority Young Adults' Perceived Lack of Labor Market Disadvantages." *Social Problems* 65:305?322. (<https://doi.org/10.1093/socpro/spx014>)